

社会

「言語によるかかわり」を通して 社会的事象を捉える生徒の育成

- ツールミン・モデルを用いた公民的分野の授業づくりと実践 -

香取市立佐原中学校教諭（前小見川中学校教諭） えんどう ともひろ 遠藤 友博

これまで私は、社会科の授業実践において生徒が主体的に活動し、学びを深める力を育むことが十分できていなかった。そこで本研究では、議論を用いた社会科授業の実践によって社会認識を形成する能力を高めることを目指し、中学校第3学年を対象として、ツールミン・モデルを組み込んだ公民的分野の単元計画と指導案の作成、授業実践を行った。

その結果、各生徒の「理由づけ」の記述に、自己の立場からだけでなく他者への視点を取り入れるなどの変容が見られた。また他の生徒との意見交換を通して、社会的事象をどのように認識し、議論を通して合意を形成したのか、会話分析により見いだすことができた。今後も生徒が主体的に社会的事象を捉える方法と実践を追究し、広めていきたい。

社会

小中一貫教育を生かした社会的な見方・ 考え方を働かせる学習の探究

- SDGsを題材とした異学年と系統的に取り組む学習を通して -

市原市立五所小学校教諭（前加茂小学校教諭） いしばし けんじ 石橋 賢二

前の勤務校は小学校と中学校が同じ敷地の中にある小中一貫教育校である。その利点を生かし、SDGsを題材とした異学年と系統的に取り組む学習を通して、社会科における「社会的な見方・考え方」を育成することを目指したものである。具体的には、小学校4、5年生、中学3年生で単元の学習内容にSDGsの中の環境問題を取り上げて、授業を実践した。学習の過程を積み重ねることで、児童生徒は、国際問題をより身近に感じるようになっていった。また、異学年合同授業を行い、各学年の考えを伝え合うことで、社会的な見方・考え方を働かせることができた。今後は本研究で得た成果を広めていくと共に、社会科に親しむ児童生徒を更に増やしていけるよう尽力していきたい。

算数

有用性の感得を目指した「比例」の指導

- フェルミ推定を基にした教材を用いる数学的モデリングを通して -

流山市立東小学校教諭（前松戸市立松飛台小学校教諭） ひらた あきら 平田 彰

「算数を勉強しても、何の役に立つのか分からない。」と感じている児童が、普段算数科の授業を行っている中で少なからず見られた。様々な調査結果からも、有用性の感得に課題が生じている現状は明らかである。そこで、小学校算数科第6学年「比例」の単元において、フェルミ推定に基づく教材を用いる数学的モデリングを通じた指導を行い、課題の解決を目指した。更に、独自に作成した「振り返りシート」を用いて学習過程を振り返る場を設定した。その結果、多くの児童が比例の有用性を感得し、教材と指導の有効性を明らかにすることができた。本研究をふまえて、他単元でも学習内容と日常生活の関連を意識しながら教材を開発し「算数は役に立つ。」と児童が実感できる授業を考え続けたい。

数学

数学科における主体的に学習に取り組む
態度の評価に関する研究

-GRITの高い生徒と低い生徒の数学的活動を比較することより-

横芝光町立光中学校教諭（前東金市立東金中学校教諭） なかの まさや 中野 雅也

数学科の学習指導において、生徒の粘り強い取組を評価するべきだと考え、本研究を始めた。GRITと数学科における認知的な能力との相関、更にGRITの高い生徒と低い生徒の数学的活動を比較し、結果について考察を行った。その結果、GRITには認知的な能力と有意な相関は見られなかったが、自分の考えを表現する活動や考えや気づきを記述する数学的活動との関係が明らかになった。このような生徒の具体的な数学的活動により、主体的に学習に取り組む態度における粘り強い取組を行おうとしている側面を評価する指標を提案することができた。今後はこの指標を基に指導、評価の実践を行い、妥当性や信頼性について検証していくことで、生徒の学びに向かう力、人間性等の育成に繋がるであろうと考える。

理科

中学校1学年「光の性質」の学習における日常生活や
社会と関連づけた深い学びを生み出す理科授業の開発市川市立高谷中学校教諭（前習志野市立第一中学校教諭） みそのう ゆうすけ 御園生 裕介

光の道すじの作図ができる一方で、できる像や光源の形を考慮することができていない生徒が多いことに課題を感じ、本研究の主題を設定した。単元の中に、自分の知識や技術を用いて身の周りの光に関する現象（「緊急車両の文字が正しく見えるしくみ」や「水族館の動物の身体がずれて見えるしくみ」）を説明する、対話的な学びを取り入れることで、深い学びを生み出すことができると考え、検証を行った。その結果、検証授業を行った生徒の、光の道すじと像を結びつけて考える力や他者に言葉で説明する力の伸長が見られた。今後は、現場での実践や他の単元での活用を通して、生徒の力を伸ばすとともに、他の先生方にご意見をいただきながらより良い方法を模索していきたい。

音楽

思いや意図をもって音楽と関わる児童の育成

-〔共通事項〕に支えられた思考を伴う音楽づくりの在り方-

市原市立国分寺台小学校教諭 さかまき 酒巻 みどり

今までの教育実践で、児童の多くは〔共通事項〕に支えられている音楽の知識や技能の積み重ねに不十分な部分があるように感じた。そこで、〔共通事項〕を拠りどころにして、思考を伴う音楽づくりの学習指導法を明らかにするため、第6学年を対象に鑑賞と音楽づくりを関連付けた「世界の音楽に親しもう」の実践を行った。知覚と感受を往還させることで〔共通事項〕の働きに目を向けさせたこと、ICTやワークシートを活用した音楽の客観的考察を通して、つくった音楽について自ら振り返ったり、友達と対話をしたりすることによって、思考しながら音楽づくりに取り組む姿が見られた。今後は他学年での有効性を追究していくとともに、音楽づくりの授業デザインを追究、発信していきたいと考える。

体育

投運動において、思考力・判断力・表現力を 引き出す低学年体育学習の在り方 -運動のこつをイメージ化するオノマトペに着目して-

南房総市立白浜小学校教諭（前三芳小学校教諭） かわな ひろこ 川名 博子

投能力において低学年からの技能的格差に課題を感じ、低学年児童が自分で体の動かし方を考える力を育てていきたいと考えた。そこで、低学年から思考力・判断力・表現力を育み、投能力を向上させていく学習の在り方を明らかにしていくため、第2学年を対象として「多様な動きをつくる運動遊び」の実践を行った。低学年児童でもイメージしやすいオノマトペで動きのこつを表現させることで、体の動かし方のこつを表現し、共有することができた。その結果、動き方の理解が深まり、投能力が有意に向上することが明らかになった。今後、低学年から自分で体の動かし方を思考させ、技能向上を促進していく指導方法を研修会等で報告し広めていきたい。

道徳

探究的な学習のプロセスを取り入れた 総合単元的道徳学習プログラムの開発 -「なりたい自分」に向かって考え続ける児童の姿を目指して-

松戸市立和名ヶ谷小学校教諭 まつなが みか 松永 美佳

道徳的価値についての理解に留まることなく、さらに主体的に自己の生き方を考え続ける学習へとつなげることに自身の課題があった。そこで、自己の生き方を問い続ける探究的な学習のプロセスを道徳科に取り入れた総合単元的道徳学習プログラムを開発した。「人とのよりよい関わりについての学習」をテーマとし、小学校5年生を対象に探究のプロセスを繰り返す授業実践を行った。その結果、児童は課題意識をもって学ぶことができ、道徳的価値の理解のもと、他の学習や生活等で学びを生かす経験を繰り返すことができた。本プログラムが、児童にとって学びの有用性を実感する機会となった。今後、他の学年やテーマにおけるプログラムを開発、実践し、さらなる活用を図っていく。

小学校外国語

オンラインで広げる小規模校のSmall Talk -多様な相手とのやり取りと対話の続け方の指導を通して-

香取市立小見川北小学校教諭（前北佐原小学校教諭） まつき たつひろ 松木 辰洋

小学校第6学年外国語科のSmall Talkを行う中で、児童と児童のやり取りが不活発であった様子から、指導の改善をしたいと考え本研究に取り組んだ。小規模校ならではのやり取りする相手の固定化や、対話の続け方の指導の不十分さを課題と捉え、多様な相手とのやり取りと対話の続け方の指導を手立てとして、相手意識をもってやり取りすることのできる児童の育成を目指した。オンライン会議システムを活用し、市内他校の児童や、大学の留学生とのやり取りを行った。さらに、対話の続け方の計画的な指導により、児童らは相手を意識した活発なSmall Talkが行えるようになった。本研究について、作成した教材とともに各種研修会で紹介し、成果を全県に広く還元していきたい。

現代的教育課題

学校教育目標の実現に向けた カリキュラム・マネジメント

-総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・デザインとカリキュラムの評価-

野田市立柳沢小学校教諭 よこた みさこ 横田 美紗子

本研究は、学校教育目標の実現に向けたカリキュラムの編成やカリキュラムを評価し、見直し・改善につながる手法を明らかにすることを目的とした。学校教育目標から育成を目指す子供の姿を資質・能力の三つの柱で整理し、それらが各教科において活用・発揮が期待できる重点単元と、各教科と総合的な学習の時間との間において活用・発揮される関連単元を設定したカリキュラムを編成し、単元の評価結果をカリキュラムの評価に活用した。その結果、育成された資質・能力が適切に活用・発揮される単元配列や単元計画、具体的な学習指導等を意図的に設定でき、目指す子供の姿の育成につながった。授業改善だけでなく、単元計画や単元配列等の見直し・改善にもつながる効果的な知見が得られた。

特別支援教育課題

肢体不自由（重度・重複障害）生徒に おけるキャリア教育の在り方

-キャリア教育の視点を踏まえた学習指導案（試案）を通してキャリア発達の充実を育む-

県立船橋夏見特別支援学校教諭 ごらい だいすけ 午来 大輔

肢体不自由（重度・重複障害）生徒一人一人が、卒業後豊かな生活が送れるようキャリア教育の充実を図りたいと考えた。そこで「個別のキャリアプラン」と「個別の教育支援計画」を参考にキャリア教育の視点を踏まえた学習指導案（試案）を作成した。それによって支援の有効性を示すとともに、個に応じたキャリア教育の目標と内容を明確化した授業づくりをすることができ、キャリア発達を育むことにつながった。その結果、新たな学習指導案にするべく「個別の教育支援計画」の作成上の留意点の見直しや本校教育課程の「キャリア教育全体計画」の新設が求められたため、導入を進めている。今後もキャリア発達を育むための授業の充実を図っていきたい。

企業等派遣

生徒に寄り添うための関わり方と その手法の在り方について

県立特別支援学校流山高等学園教諭 みき まさし 三木 将司

生徒の意欲や主体性、自己肯定感の向上に向け、生徒への関わり方の幅を広げたり、寄り添うための関わり方や手法を学んだりしたいと考え研修に臨んだ。千葉県立障害者高等技術専門校は、就職や自立に特化し、必要な知識や技能の習得を目指した職業訓練を行っている。指導員が訓練生のお話を最後まで聞く、気付きを受け入れる、認める、褒める、自己選択や自己決定などを大切にしながら関わっていたことが印象的であった。

生徒の「自分の障害特性を知る」「納得感をもって行動する」や「気付く」のために、教師が「表面上だけではなく、経緯を明確に捉える」「認める、褒める」や、「気付けるためのきっかけづくりをする」ことなど、研修での学びを今後の学習活動や教育相談に活かしていきたい。

個別最適な学びを実現するための学びの枠組みの在り方 — 小学校4年生算数科の授業実践を通して —



市川市立富貴島小学校教諭 わりた 割田 ようじろう 陽二郎

1 研究の動機

児童一人一人の学びのニーズやペースは異なっている。しかし、担任として授業を行っている中で、児童の理解が不十分であっても、次の単元に進まなければならない場面が多くある。

児童が自分に合った学習課題や学習方法を選び、一定の目標を達成できるような指導について理論と実践の両面から学びたいと考え、教職大学院に入学した。

2 研究の実際

前述のねらいを達成するためには、教師が授業全体を細かくコントロールするのではなく、児童自身が自分の学びをコントロールするという発想の転換が必要になる。しかし、このような学習者主体の学びは、放任授業になる可能性もある。

そこで本研究では、児童の学習の個人差が大きい第4学年算数「2けたでわるわり算の筆算」を研究対象に、次のような学びの枠組みで、授業実践を行った。

- 1 単元の到達目標は全員共通とする。
- 2 1時間の到達目標はそれぞれ異なるため1時間の学習で何を学ぶか、どうやって学ぶかは児童が決める。
- 3 何を、どれだけできれば良いか、何時間で学習するかを単元の最初に示す。
- 4 小單元ごとのチェックテストを行い、到達度を教師が把握する。
- 5 いつ誰と学習を進めるか、児童が決める。

児童の学習の進め方は、単元の系統を遡り自分の苦手な所から学び直しをする児童や、友達同士で話し合いながら学習を進める児童など、多様な学びの方法が見られた。単元の学習が進んでいく中で、「ちょっと教えて」といった小さなやりとりが学級内で増えていった。児童一人一人の学習の進捗を把握できるため、教師は学習に遅れがある児童の個別指導に充てる時間が増えた。

3 研究の成果と課題

(1)成果

単元の目標達成のための学習内容や学習時間を明確にし、小單元ごとに自分の学習の到達度を把握できる授業設計により、自分の学びに対してメタ認知的コントロールができたことがわかった。さらに、自分で決めた学びであるため、自分の学びに対して粘り強く取り組んでいた。

(2)課題

タブレット端末だけで学習を進めると学習内容の定着に課題が見られた。タブレット端末に表示された問題を、ノートに手書きで計算をする。間違えた時は、教科書の該当ページを読み返すといった紙媒体との併用が学習の定着には必要だった。

また、自分のペースで学ぶ点は尊重しつつ、つまづきが多い所では少人数の指導を単元の指導計画に位置付ける必要があった。

本実践は、単元の系統が直線的である「数と計算」領域でのものであった。今後は他領域や他教科においても、児童が自分の学びをコントロールし、個別最適な学びが実現できるよう研究を続けたい。

不登校対応のための小学校における別室支援の在り方 — 不登校支援の現地調査を通して —



さいとう じゅん
松戸市立根木内小学校教諭 齋藤 潤

1 はじめに

不登校児童数の増加が続いている。そこで、校内教育支援センター等の不登校対応の別室（以下、不登校支援室）設置が小学校で進みつつある。しかし、別室支援の在り方は担当職員個人の教育観や知識、経験に依るところが大きく支援の軸や方向性は不安定である。

このことから小学校における不登校支援室の望ましい在り方について指針を示すことを目的とし研究を行った。

2 実践

(1)不登校支援施設への視察

学校内外の不登校支援の現状から不登校支援の全体像を掴むため、近隣の市や県内外で先進的に実践が行われている不登校児童生徒に関わる施設等24ヶ所の視察を行った。

そこで各施設の目指す支援の方向性と児童生徒の過ごし方が関連していることがわかった。過ごし方の観点から不登校支援の全体像を表したのが図1である。

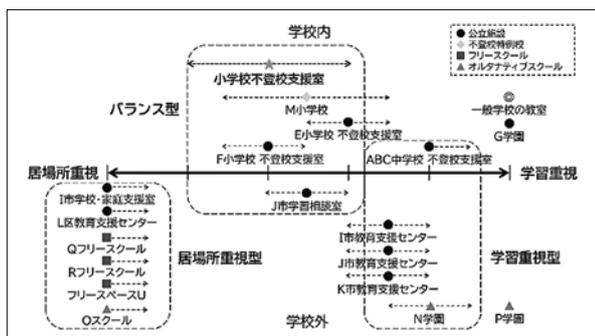


図1 不登校支援全体像

居場所重視型は、やりたいことをして、あるいはやりたくないことはしないで過ごししのエネルギーを蓄えていく場。学習重視型は、主に学習を進めることで、勉強に対する不安を取り除いたり進路を見据えた活動をしたり

する場。バランス型は、学習をしながらも心を休めることができる場である。

タイプに優劣はない。重要なことは、児童が様々なタイプの施設からその時の自分に合った施設を選べることである。

(2)不登校特例校での参与観察とスタッフへの聞き取り調査

不登校支援室における支援の要点を検討するため、不登校特例校で参与観察を行った。半年間、約170時間、担任の補助役として教室に入り児童と関わりながら児童の様子や児童への職員の関わり方を観察、記録した。また職員に半構造化インタビューを行った。

そこで不登校支援の場において大切なのは児童を尊重することであることがわかった。中でもハード面で大切なことは居場所となる環境を整えること、またソフト面で大切なことは職員が児童に寄り添う姿勢をもつことである。

3 考察

小学校における不登校支援室は、図1に示すと若干居場所に寄ったバランス型であり、その指針は次のように提示する。

学習を基本としつつ、自分の好きなことをして過ごすことを許容する緩やかな居場所であること

4 おわりに

校内における不登校支援室の「居場所の機能」に対しては職員や保護者から「甘やかしているのではないか」といった様々な考えが出てくることは想像に難くない。設置の際には職員や家庭と指針について理解を深め共通認識のもとに進めていくことが重要である。